



今夏行われた「ルーブル美術館展」で展示室を冒険する
アート・エデュケーターと子供たち

て、隣の東京藝術大学と

り、またそれを誰かに伝えようとする

（東京都美術館学芸員、アート・コ
ミュニケーション担当係長）

多様化する中で、その多
切だとわかっていても、
人々のライフスタイルが
多様化する中で、その多
様性を受け止め合えるような「でき
れば義務的でない」「自然と対話が
生まれる」参加の場や機会があるか

のひとは、人々の営みの多様性を
担保することです。美術館で行われ
る展覧会は、古今東西の
人間が生み出した創造物
を丁寧に見せながら、人
間のさまざまな価値観か
ら生まれた営みを肯定し
つつ、検証する試みでも
あります。その美術館の
性質を活かして、美術館
を拠点に多様な価値観を
受けとめ合う、新しい参
加の回路づくりを目指す
活動を、東京都美術館が
リニューアルを機会とし

びのびゆったりワークショップ」な
ど、様々なプログラムはとびラーが
プレイヤーになる事で生まれてきま
した。（詳細は「とびらプロジェクト」
や「Museum Start あいこうえの」
で検索し、各ウェブサイトでご覧下
さい）とびラーの働きは、社会への
主体的な参加のあり方の一形態であ
り、さらに3年任期で卒業のものは、
また別の形でそれぞれがコミュニケ
ーション回路を作る、つなぎ手にな
ることが目指されています。

る別の人の主体的な意志が積み重な
って、美術館に展示される展示物と
なります。つまり展示作品には、こ
の世へ自ら参加してい
こうとする主体的なエ
ネルギーが幾重にも重
なって宿っているのだ

アートが促す「参加」と「包摂」

た、参加する事が大
て2つ目は、参加を楽しむ感性を発
展させ、今度は参加を誘う「つなぎ
手」になることです。このつなぎ手
となる心持ちを持った人々が世の中
に増えたら、私たちの不安はもう少
し減っていくのかもしれない。

といえは、そう多くはなく、人々は
自分の足を強くするような、新し
いコミュニケーションの回路を求め
つつも、使い慣れた回路のなかでた
たずんでしまっていることがあります。
そこでアート、そして美術館の出

た授業「スペシャル・マンデー」や、
誰でも参加できる「あなたも真珠の
耳飾りの少女」「とびらボードで
GO!」や、障書のある子も無い子
も一緒に造形や鑑賞活動をする「の

る別の人の主体的な意志が積み重な
って、美術館に展示される展示物と
なります。つまり展示作品には、こ
の世へ自ら参加してい
こうとする主体的なエ
ネルギーが幾重にも重
なって宿っているのだ

新美術時評

＝ 美術と教育 ① ＝

稲庭彩和子

今の社会で、人々がもっとも関心
ある、解決しなければと感じている
事のひとつは「それぞれの人が社会
生活の中で簡単に孤立してしまいや
すいこと」ではないでしょうか。あ
の3月11日の大震災以降ニュースな
どを聞くたびに、私たちはそのこと
を随分と考える機会がありました。
人々が互いに孤立しないために重
要な事は2つあります。ひとつは誰
かと関わる機会を持ちつつけるこ
と、つまり「参加」をする事。そし
て2つ目は、参加を楽しむ感性を発
展させ、今度は参加を誘う「つなぎ
手」になることです。このつなぎ手
となる心持ちを持った人々が世の中
に増えたら、私たちの不安はもう少
し減っていくのかもしれない。

連携し、始めました。
そのひとつ「とびらプロジェクト」
では、一般から募った約120名の
市民がアート・コミュニケーター（愛
称：とびラー）として、ユニークな
活動を展開しています。とびラーは
無償の活動ですが、彼らは美術館の
サポーターという位置づけではなく
プレイヤーです。美術館の学芸員や
大学の教員とともに、美術館を拠点
として、文化や社会への「参加の回
路」を作っていく主体的なつなぎ手
になります。これまで学校と連携し
た授業「スペシャル・マンデー」や、
誰でも参加できる「あなたも真珠の
耳飾りの少女」「とびらボードで
GO!」や、障書のある子も無い子
も一緒に造形や鑑賞活動をする「の



東京都美術館でアート・コミュニケーターとして活躍する
「とびラー」の皆さん（前列右が筆者）